

源氏物語における「常陸」について

—風土的考察—

森 本 茂

一、源氏物語の地名の取入れかた

源氏物語に登場する地名は、北限の「袖浦」(出羽国)から南限の「肥後国」まで、一四一箇所にのぼるのであるが、そういう地が源氏物語に取入れられるに当たっては、作者の意識や体験の上からみて、さまざまの条件を持っていたようである。

それにはおよそ三つの方法があったとわたくしは考える。

すなわち、第一は作者が実際に行つて体験した地である場合。たとえば、紫式部集に、「近江の湖にて三尾が崎といふ所に網ひくを見て」(統国歌大観本。以下同じ)とあるから琵琶湖、同じく紫式部集に、「賀茂に詣でたるに、子規なかもといふ曙に、片岡の梢をかしう見えけり」とあるから上賀茂神社、伊勢大輔集に、「紫式部清水に籠りたりしに参りあひて、院の御れうにもろともに御あかし奉りしをみて、櫛の葉に書きておこせたりし」(統国歌大観本)とあるから清水寺などは、作者が実際に行つた所であることが明らかである。

すると、京都から琵琶湖に行く途中にある逢坂山や、清水寺のふも

源氏物語における「常陸」について

との愛宕・鳥辺野のあたりも、作者の体験した地になる。また記録はないけれども、当時の観音信仰からいって、長谷寺や石山寺にもたびたび参詣したことであろう。そのことを裏づけるかのように、初瀬は十二例を数えて、玉鬘物語の重要な背景になつてゐるし、京都と初瀬の途中にある宇治はまた、宇治十帖のおもな舞台になつてゐて、宇治八の宮の山荘や夕霧の領地の記述は、地形的にもじつに正確である。石山も九例を数え、逢坂山を越えて石山寺にお参りする話は、真木柱・浮舟・蜻蛉の巻にあらわれる。

第二はまったく歌枕的に取入れられた場合であつて、この例は多い。たとえば、信濃国の姨捨山のことは源氏物語に、「さらに姨捨山の月澄みのぼりて、夜更くるままによるづ思ひみだれ給ふ。」(宿木。日本古典全書本。以下同じ)とあるが、これは「わが心なぐさめかねつさらしなや姨捨山に照る月を見て」(古今集・雑上・よみ人しらす)の歌で知られ、月の名所である姨捨山を取入れたのであつて、古歌に詠まれた姨捨山を想像して書いたにすぎず、作者が実際に姨捨山に行つたわけではないであろう。「安積山」「武隈の松」「緒絶の橋」などみな

歌枕の用法にすぎない。

第三は作者が実際に行ってもいないし、単に歌枕のだけでもないという場合である。たとえば、常陸・須磨・明石・筑紫などがそれである。しかもこれらの地は物語の背景として重要な所である。こういう地を作者が相当の重みをもって取入れようとするからには、まったく偶然にそこを選んだというわけではなくて、それなりの由来があったであろう。つまり作者の創作意識をかりたてた何らかの要因があったにちがいないと思われる。

源氏物語を風土的に考察しようとするとき、この第三の場合は、作者の創作意識と構成の側に立って、もっと積極的に説明されなければならぬ分野であろうと考えられる。そこでわたくしは、第三の場合に属する常陸について次に考察して行きたいと思う。

二、源氏物語に描かれた常陸

源氏物語には常陸国およびその関係事項が非常に多い。次に項目に分けて本文をかかげてみる。(本文は日本古典全書本による。①・②のよな数字は冊数、その下の数字は頁数である。)

(一) 国名

○(右衛門の佐は)覚えぬ世の騒ぎありしころ、物の聞えにはばかりて、常陸に下りしをぞ、すこし心おきて年頃は思しけれど、色にも出だし給はず。

(関屋・②・二六一)

○右近が姉の、常陸にても人二人見侍りしを、

(浮舟・⑦・七三二)

○草わかみ常陸の海のいかが崎いかであひ見む田子の浦浪

(常夏・③・二二〇)

※「源氏物語大成」には「ひたちのうら」とある。

○常陸なる駿河の海の須磨の浦に浪立ちいでよ箱崎の松

(常夏・③・二二二)

○(源氏は)あづまをすががきて、「常陸には田をこそ作れ」といふ歌を、声はいとなまめきて、すさび居給へり。

(若紫・①・三二七)

(二) 人名

(1) 常陸介(空蟬の夫)

○伊予の介といひしは、故院かくれさせ給ひてまたの年、常陸になりて下りしかば、

(関屋・②・二五九)

○かかる程に、この常陸の守、老のつもりにや、悩ましくのみして

^{注4}

(関屋・②・二六三)

(2) 常陸の親王(末摘花の父)

○常陸の親王の書き置き給へりける、紙屋紙の草子をこそ、見よとておこせたりしか。

(玉鬘・③・一三二)

(3) 常陸の君・常陸の宮の君・常陸宮・常陸の宮の御方(末摘花)

○東の院にもものする常陸の君の、日頃わづらひて久しくなりにけるを、

(若菜上・④・六三)

○常陸の宮の君は、父親王の亡せ給ひにし名残に、また思ひあつかふ人もなき御身にていみじう心細げなりしを、

(蓬生・②・三三六)

○(源氏は)常陸の宮にはしばしば聞え給へど、なほおぼつかなくのみあれば、
(未摘花・①・三四四)

○常陸の宮の御方は、人の程なれば、心苦しく思して、

(初音・③・一四一)

※「源氏物語大成」には「常陸の宮の御には」とある。

○常陸の宮の御方、怪しうものうるはしう、さるべき事の折過ぎぬ、
古代の御心にて、
(行幸・③・二五四)

(4)常陸の宮(今上の第四皇子)

○四の御子、常陸の宮ときこゆる、更衣腹かぢいばらのは、思ひなしにや、け
はひこよなう劣り給へり。
(匂宮・⑤・一四七)

○兵部卿官、常陸の宮、后腹の五の宮と、ひとつ車にまねき乗せ奉
りて、まかで給ふ。
(匂宮・⑤・一四七)

○祖率みじ達は、三の宮、常陸の宮などさぶらひ給ふ。

(宿木・⑥・二一九)

(5)常陸の守・常陸・常陸の前の守・常陸の前司殿(浮舟の養父)

○心には違たがはじと思ふ常陸の守より、様容貌も人のほども、こよな
く見ゆる五位四位ども、あひひざまづき待ひて、
(東屋・⑥・二五二)

○かれぞこの常陸の守の婿の少将な。

(東屋・⑥・二五四)

○右大將は、常陸の守の女をなむよばふる。

(東屋・⑥・二八八)

○かしこには、常陸の守、立ちながら来て、

(蜻蛉・⑦・二二三)

○今おどろく人のみ多かるに、常陸の守来て、

(蜻蛉・⑦・二二四)

○さてまた常陸になりて下り待りにけるが、

(宿木・⑥・二〇二)

○かの常陸の子どもは、かうぶりしたるは藏人になし、

(手習・⑦・二二七)

○常陸の前司殿の姫君の、初瀬の御寺に詣でもどり給へるなり。

(宿木・⑥・二二四)

○腕をさし出でたるが、まろらかにをかしげなる程も、常陸殿など
いふべくも見えず、まことにあてなり。

(宿木・⑥・二二六)

※この「常陸殿」は「常陸守の令嬢」(浮舟)の意味を持っている。

○常陸の前の守ながしが妻は、叔母とも母ともいひ侍るなるは、
いかなるにか。
(蜻蛉・⑦・二三六)

○常陸の北むねの方は、おとづれきこえ給ふやといふは、妹なるべし。

(手習・⑦・二二三)

(6)常陸殿(浮舟の母)

○いたく肥え過ぎにたるなむ、常陸殿とは見えける。

(東屋・⑥・二五七)

○常陸殿のまかでさせ給ふ。

(東屋・⑥・二六五)

○常陸殿といふ人やここに通はし給ふ。

(東屋・⑥・二六五)

○常陸はいと久しうおとづれきこえ給はざめり。

(手習・⑦・二二三)

白邸宅

(1)常陸の宮(末摘花の父の邸)

○ここは常陸の宮ぞかしな。

(蓬生・⑧・二五〇)

(2)常陸殿(浮舟の養父の邸)

○乳母車を乞ひて、常陸殿へ往ぬ。

(東屋・⑥・二七八)

(四)常陸帯

○「道のはてなる常陸帯の」と、手習にも言種にもするは、いかに

思ふやうのあるにかありけむ。

(竹河・⑤・二〇二)

三、源氏物語における「東」の観念

常陸国は「東」に属するが、源氏物語では「東」はどのような所として描かれているかを考えてみたい。

宿木の巻では薫が宇治におもむいて、長谷寺詣でをした浮舟の一行に出合つて、浮舟のかれんな容姿をかいま見るが、そのとき泉川(末津川)を船で渡つた浮舟が苦しうにしているのので、侍女が浮舟にむかつて、

いでや、ありくは、東路思へば、いづこか恐しからむ。

(宿木・⑥・二二六)

という。さらに浮舟をかいま見た薫は浮舟の印象を、

腕をさし出でたるが、まろらかにをかしげなる程も、常陸殿などいふべくも見えず、まことにあてなり。

(宿木・⑥・二二六)

と述べている。つまり、東路は恐ろしい所で、常陸はずっと片田舎の

所として描かれている。

次に、浮舟づきの侍女右近が、自分の姉の例を引いて浮舟に対して、「薫が匂宮か、どちらかと早く結ばれるのがよろしい。」とすすめる所で、

すべて女のたいだいしきぞ、とて、館のうちにも置い給へらざり

しかば、東の人になりて、ままも今に恋ひ泣き侍るは、罪深くこ

そ見給ふれ。

(浮舟・⑦・七四)

といっている。ここで右近の母は、東国の人になってしまった娘(右近の姉)の不幸を悲しんでいる。

次に、浮舟が小野に隠棲してから、ある日わが身の不運な過去を回想する所に、

遙かなる東をかへるがへる年月をゆきて、

(手習・⑦・一九二)

とあつて、「東」の上に「遙かなる」という形容動詞をつけている。つまり「東」は辺境の地として描かれている。

次に、浮舟の養父(常陸介)は、上達部の筋を引いていて財豊かではあるが、気位が高く、風流らしい割には賤しく荒々しく、田舎じみた所があると説明して、その次に、

若うより、さる東の方の、遙かなる世界にうづもれて、年経けれ

ばにや、声などほとほとうち歪みぬべく、物うち言ふ、すこしだみたるやうにて、

(東屋・⑥・二三三)

とある。すなわち、生まれのよい養父の人柄が下つたのは、じつに「東」という環境によるのだと述べている。

以上からみると、当時の一般観念のように、源氏物語においても「東」は辺境の地で恐ろしく、ことばになまりがあつて、無風流な所だと考えられているのである。

四、平安時代における「東」

いったい「東」とは、平安時代、さらに奈良時代には、どの地方をさしていたのであろうか。

記紀で倭建命の東征のところに、

故、登_一立_二其坂_一、三歎詔云阿豆麻波夜。故号_二其国_一謂_二阿豆麻_一也。

(古事記・中・日本古典文学大系本)

故、登_二碓日嶺_一、而東南望之、三歎曰、吾孀者耶。故因号_二山東_一諸国、曰吾孀国也。

(日本書紀・景行紀・日本古典全書本)

とある。古事記の「其坂」は足柄山を意味している。日本書紀は「碓日嶺」(群馬県と長野県の境) になつてゐるから、両者に相異がみられるのであるが、それはそれとして、足柄山・碓日嶺以東を「東」と考えているのである。

また、常陸国風土記にも、

問_二国郡旧事_一、古老答曰、古者、自_二相模国足柄岳坂_一以東諸国惣称_二我姬国_一、是当时、不言_二常陸_一、唯称_二新治筑波茨城那賀久慈多珂国_一、各遣_二造別_一令_二檢校_一、其後、至_二難波長柄豊前大宮臨軒天皇之世_一、遣_二高向臣中臣幡織田連等_一、惣_二領自_一坂已東之国、

源氏物語における「常陸」について

干_レ時、我姫之道、分為_二八国_一、常陸国、居_二其一_一矣。

(総記。日本古典文学大系本)

とあつて、足柄山以東を「東」といつている。またここでは、孝徳天皇の御代に大化改新によって国郡制ができたとき、足柄山以東を八国に分け、常陸国はその一つであると述べていて、この八国は、相模・武蔵・上総・下総・上野・下野・常陸・陸奥をいう。

万葉集になると、大伴家持の歌に、「あづまの国の陸奥の小田なる山に」とあつて、やはり陸奥を東の範圍にふくめてゐる。しかし、巻十四・東歌では、右の八国のはかに、信濃(五首―三三三二・三三三九・三三九九・三四〇〇・三四〇一)、遠江(三首―三三五三・三三五四・三四二九)、駿河(六首―三三五五・三三五六・三三五七・三三五八・三三三九・三四三〇)、伊豆(一首―三三六〇)の歌がみえるし、柿本人麻呂が高市皇子の死を詠んだ長歌には、

真木立て 不破山越えて 高麗劔 和麩が原の 行宮に 天降り
座して 天の下 治め給ひ 食す国を 定めたまふと 鶏が鳴く
吾妻の国の 御軍士を 召し給ひて ちはやぶる 人を和せと
服従はぬ 国を治めと 皇子ながら 任せ給へば

(巻二・一九九)

とあつて、不破山以東を「東」と考えているようである。

信濃・遠江を境にしてそれ以東を「東」とするのは、東海道では濃美平野が尽き浜名湖があつて遠江に入り、また東山道では御坂峠を越えて信濃に入るといふ地理的条件によるのであろう。

ところが、古今集の巻二十・東歌には、常陸国風土記にあつた八国

以外に、甲斐国、(二首一〇九五・一〇九六)国歌大観による。以下同じ、伊勢国(二首一〇九七・一〇九八)の歌がみえている。

また伊勢物語で東下りの所に、

むかし、おとこありけり。京にありわびて、あづまにいきけるに、伊勢、おはりのあはひの海づらを行くに、浪のいと白く立つて見
て、……

(七段。日本古典文学大系による。以下同じ)

むかし、おとこ有りけり。京や住み憂かりけん、あづまの方に行きて住み所もとむとて、ともとする人ひとりふたりして行きけり。信濃の国、浅間の嶽にけぶりの立つを見て、……

(八段)

むかし、おとこありけり。そのおとこ、身をえうなき物に思ひなして、京にはあらじ、あづまの方に住むべき国求めにとて行きけり。もとより友とする人ひとりふたりしていきけり。道知れる人もなくて、まどひいきけり。三河の国、八橋といふ所にいたりぬ。……

(九段)

とある「東」も、伊勢・尾張から東をいつているように思われる。中世になると、風雅集に「貢物絶えず供ふる東路の勢多の長橋音もとどろに」(巻二十・兼盛)とあって、近江国以東を「東」にふくめているし、また八雲御抄に「あづまの国などいふは惣東国なり。」とあるのも参考になろう。

以上の点からすると、「東」はもとは上野国吾妻郡を本拠としていたろうが、次第にその範囲が広がって、現代の関東地方から奥羽地方

一帯にわたり、平安時代には京都から東の辺境の地方というくらいのも漠然とした意味に用いていたようである。

五、源氏物語における「常陸」

では、源氏物語において、前項でみたような「東」にふくまれる地は、どのような登場のしかたをするであろうか。常陸以外の地についてみる。

近江君が姉の弘徽殿女御に当てた歌、「常陸なる駿河の海の須磨の浦に浪立ちいでよ箱崎の松」(常夏・⑧・二二二)、「草わかみ常陸の海のいかが崎いかであひ見む田子の浦浪」(常夏・⑧・二二〇)というように本末のあわぬ歌にあらわれたり、古今和歌六帖の「知らねども武蔵野といへばかこたれぬよしやさこそは紫の故」(巻五・かきの女郎)をふまえて、「武蔵野といへばかこたれぬ」(若紫・①・三三三)、「武蔵野といへばかしこけれど」(常夏・⑧・二〇九)とあらわれたり、万葉集の「安積山影さへ見ゆる山の井の浅き心をわが思はなくに」(巻十六・よみ人しらず)をふまえて、「安積山浅くも人を思はぬになど山の井のかけはなるらむ」(若紫・①・三三二)という歌であられるという具合に、明らかに歌枕の用法にすぎない。

しかるに、作者も辺境の地で恐ろしく、無風流な所と考えていた「東」のうちの常陸だけが、前に引用したように、歌枕的ではなくてじつに多く取入れられていて、重要な背景になっているのは、どういうわけであろうか。そこには作者の意識を喚起した何ものかがあったに

ちがいない。これらの点について次に触れてみたいと思う。

第一には、「東路の道のはて」なる「常陸」という印象が強かったろうということである。前に引用したが、

「道のはてなる常陸帯の」と、手習にも言種にもするは、いかに思ふやうのあるにかありけむ。
(竹河・⑤・二〇二)

とあったし、さらに大宮の喪に服している夕霧と玉鬘が歌を贈答する所に、

夕おなじ野の露にやつるる藤袴あはれはかけよかごとばかりも
道のはてなるとかや、いと心づきなくうたてなりぬれど、見知らぬさまに、やをら引入りて、

玉たづぬるにはるけき野辺の露ならばうす紫やかごとならまし
(藤袴・③・二六七)

ともあって、傍線の箇所は、「東路の道の果なる常陸帯のかごとばかりも逢はむとぞ思ふ」(新古今集 恋一・よみ人しらず——古今和歌六帖・巻五には「あひ見てしがな」とある)の歌によっている。

常陸帯とは常陸の鹿島明神の祭礼の日に、男女の交情を占うという習俗があり、その氏子の女たちによって行われた帯占いの帯をいったもので、「鹿島の帯」ともいって、平安時代の歌語であった。

中村義雄氏は、更級日記の冒頭「あづまぢの道のはてよりも、なほ奥つかたに生ひ出でたる人、いかばかりかはあやしかりけむを」の「あづまぢの道のはて」もこの「東路の道の果なる常陸帯のかごとばかりも逢はむとぞ思ふ」の歌に拠ったと述べておられるが、わたくしもそのように考えたい。すなわちすでに紫式部の時代に、「東路の道の

源氏物語における「常陸」について

果」としての「常陸」の印象が観念的に非常に強くあり、それが更級日記の時代にも続いてきたと考えてよからうと思う。けっきよ、極端にいえば、「東」は観念的にその果なる「常陸」で代表されていたであろう。

第二は、常陸国にある筑波山が歌枕としてあまりにも有名であったということによるであろう。源氏物語に「筑波山」は四例登場する。

(1) (空蟬は) 人知れず思ひやり聞えぬにしもあらざりしかど、(源氏に) 伝へ聞ゆべきよすがだになくて、筑波根の山を吹き越す風も浮きたる心地して、いささかの伝へだになくて年月かさなりにけり。
(関屋・③・二五九)

(2) かの筑波山も、からうじて心ゆきたるけしきにて、わたらせ給はむことをいとなみ思ひ給へしに、
(蜻蛉・⑦・一一六)

(3) 筑波山を分け見まほしき御心はありながら、は山の繁^{しげ}まであながちに思ひ入らむも、いと人間軽々しう、かたはらいたかるべき程なれば、
(東屋・⑥・二三三)

(4) わが身ひとつの、とのみ言ひ合する人もなき、筑波山のありさまも、かくあきらめきこえさせて、いつもいつも、いとかくて侍はまほしく思ひ給へなり侍りぬれど、
(東屋・⑥・二五八)

このうち、(2)の「かの筑波山」とは浮舟の母のこと、(3)の「筑波山」は浮舟のこと、(4)の「筑波山のありさま」は常陸国のありさまをいう。また(3)の「筑波山を分け見まほしき御心はありながら、は山の繁まであながちに思ひ入らむも」は、源重之の「筑波山端山繁山しげけれど思ひ入るにはさはらざりけり」(新古今集・恋一)を引く。重之は

四品貞元親王の孫で、従五位上左馬助相模権守となり長保二年（一〇〇〇）没した人で、三十六歌仙のひとつである。

以上のように、常陸国や、常陸国出身の者を筑波山で代表させているのであるが、それは歌枕として名高い筑波山に作者の関心が強くそがれたためであろう。

いったいに筑波山のこととは、古くは常陸国風土記に次のようにみえている。

夫筑波岳、高秀千雲^二、最頂西峯崢嶸、謂^レ之雄神^一、不^レ令^レ登臨^一、但、東峯四方磐石、昇降峽屹、其側流^レ泉、冬夏不^レ絶、自^レ坂已東諸国男女、春花開時、秋葉黄節、相携駢闐、飲食齋費、騎歩登臨、遊樂栖遲。
(筑波郡)

万葉集・巻十四の東歌に常陸歌が十二首あるが、そのうちの十一首（三三五〇・三三五二・三三八八〜三三九六）が筑波山の歌であり、巻二十の防人の歌にも三首（四三六七・四三六九・四三七二）ある。その他、筑波山に登って詠んだ歌や、筑波山に登って嬾歌会^{かたがひ}をする日に詠んだ歌などが長歌・短歌あわせて四首（三八二・一七五三・一七五七・一七五九）あり、このうち三八二の長歌には「鶏が鳴く 東の国に 高山は 多にあれども 朋神^{ともかみ}の 貴き山の 竝み立ちの 見が欲し山と 神代より 人の言ひ継ぎ 国見する 筑波の山」とあって、神聖視した気持がみられる。

古今集の仮名序には、「筑波山にかけて君をねがひ」「筑波山のふもとよりもしげくおはしまして」とあり、集中に三首（九六六・一〇九五・一〇九六）あるが、このうち一〇九五・一〇九六は東歌の中の常陸歌であり、常陸歌二首とも筑波山の歌で占められている。

さらに後撰集に二首（七七七・一一五二）、拾遺集に一首（六二七）みえる。

紫式部の時代までに筑波山はこのようにたびたび詠まれてきて名高く、とくに古今集仮名序の「筑波山にかけて君をねがひ」（一〇九五の歌による）は内容の点からいって、筑波山の歌枕としての名声をいやが上に高めた感じがする。

紫式部もこのような筑波山におのずと関心を向けたであろうと考えられる。

以上の二点から常陸国が作者の関心をとらえたと考えるのであるが、それでは常陸国の描かれかたは源氏物語においてどうかというに、前に引用したように、筑波山で代表させたり、人名に常陸を冠するだけであって、なんら具体的な描写がないのである。長谷章久博士もこの点について、「ボロの出ないように書いてはいるものの、紫式部の常陸に関する知識が人聞き以上に出ていないことを明らかに示している^{注10}。」^{注10}とっておられる。まったく「人聞き以上に出ていない」のである。

それについて常陸は重要な背景になっているのであるが、作者をして常陸に関心を向けさせたのは前に述べた二点であろうと考えられるが、もっと直接的な何ものかがあったのではなからうかとわたくしは考える。ということは、「人聞き」の「人」とはどんな人であったらうかという問題である。最後にこの点について考えてみたい。

まず思い浮ぶのは、作者の父藤原為時が越後守や越前守を歴任したから、常陸介（空蟬の夫）や常陸介（浮舟の養父）を創造したのである

うということであるが、それは常陸に限ったことでなく、源氏物語には紀伊守・伊予介・筑前守・近江守・和泉守・因幡守・河内守・讃岐守・摂津守・播磨守・陸奥守・大和守・豊後介など、多くの守や介が登場するから、何ら決定的な動機にはならない。

ついでに言えば、父為時からの影響はとくに強く明石の物語に作用しているように考えられる。為時について「類聚符宣抄」巻八の安和元年十一月十七日の条に、

権大納言藤原朝臣伊尹宣。奉勅。播磨権少椽藤原為時任符。不待本任放還。且令請印者。

とある。すなわち為時は安和元年（九六八）以来、播磨の権少椽であった。為時は天祿元年（九七〇）二十四歳で、妻の為信女（紫式部の母）は二十歳くらいであったろうといわれる。ともかく作者の生まれる前後、父為時は播磨守に仕えていたのであって、その経験談を後に作者に話して聞かせたらしく思われる。というのは、若紫の巻で、北山に出かけた源氏に隨身良清が明石のことを話す所に、

近き所には、播磨の明石の浦こそなほ殊に侍れ。何のいたり深き隈くまはなけれど、ただ海の面を見渡したる程なむ、あやしく異所に似ず、ゆほびかなる所に侍る。

（若紫・①・二九二）
という自然描写から入って、明石入道とその娘の話に移り、さらに明石の巻を導くのであるが、為時から聞いた播磨の明石の具体的な話がここに大きく働いていると考えられるのである。

それにくらべると常陸には、そういう直接的な影響があったとは考えられないのであるが、ただ作者の外祖父藤原為時（作者の母の父親）

が常陸介であったという事実が、あるいは常陸を取入れる心理的な機縁になったのではなからうかと思う。

為信は文範（延喜九年一〇九〇生まれ）の三男であるから、天慶（九三八〜九四六）の初めごろの生まれだろうと、今井源衛氏は「紫式部」（吉川弘文館の「人物叢書」）の中で推定しておられる。「天曆御記」によると康保二年（九六五）正月に藏人、「多武峯略記・下」によると同年従五位上・越後守となり、その後「尊卑分脈」によると「常陸介・右馬頭・従四位下・右近少将」であった。常陸介であったことは「西宮記」裏書にもみえ、「小右記」の永延元年（九八七）正月十日の条に「常陸為信朝臣」が出家したとある。

作者の生まれたのは諸説があり、寛弘五年三十一歳説（天元元年一〇九七―生まれになる）（紫家七論）、天元元年（九七八）前後説（与謝野晶子・石村貞吉・島津久基）、天延元年（九七三）説（岡一男）、天祿元年（九七〇）説（今井源衛）などあるが、為信が出家したのは、上限の今井説では作者十七歳のとき、下限の紫家七論説では作者九歳のときになる。ともかく作者の幼時あるいは少女時代に為信が常陸介であったようである。

為信から作者が常陸のさまを直接に聞く機会があったかどうかかわからないが、もし直接聞いていたならば、ちょうど明石の描写程度には具体的に常陸が描かれたと考えられるが、あのように人間き程度の観念的描写であるから、おそらくは為時などの口を通して伝聞的に聞いた程度であったように考えられる。

直接の話と伝聞の話のちがいは、明石と常陸の描写のちがいとなっ

て物語の表面におし出されたという感じがする。

以上わたくしは、源氏物語において常陸が取入れられたのは、「東路の道の果」なる常陸でもって「東」を代表させた意識と、歌枕として名の通っている「筑波山」に引かれたためと、心理的な動機は外祖父為信がかつて常陸介であったということに関係していよう、ということについて述べたのである。常陸以外の所では、須磨・明石・筑紫が問題になるが、それについては稿を改めて述べたいと思う。

注6 田辺幸雄氏はこの点について「東歌」(「解釈と鑑賞」昭和三十六年春の臨時増刊号)の中で、倭建命の帰還コースが記紀で異なるのは、紀の方は当時有力な勢力を誇っていた毛野国、わけでも上野国を頭においていたためであろうと述べておられる。

注7 田辺幸雄氏の前記論文や、森本治吉博士「東国的世界と東歌・防人歌」(「解釈と鑑賞」昭和三十九年一月号)参照。

注8 「常陸帯」については、中村義雄氏著「王朝の風俗と文学」(至文堂)二七六頁に詳説されている。

注9 中村義雄氏著「王朝の風俗と文学」(至文堂)二七八頁参照。

注10 長谷章久博士著「古典文学の風土」(諸国編)八五頁。

(本学専任講師——国文学)

注1 源氏物語に登場する地名一覧は、ここでは紙数の関係で省略する。「源氏物語必携」(秋山虔氏編・学燈社)の中の拙稿「文学散歩案内」の「源氏物語の地名一覧と解説」を参照されたい。

注2 片岡山は上賀茂神社の東の山をいうから、ここは上賀茂神社をいう。

注3 宇治八の宮の山荘と夕霧の領地の説明が正確である点については、かつて拙著「源氏物語の風土」(白川書院)一四九頁で具体的に述べた。

注4 常陸は上総・上野国とともに親王の任国であって、親王を国守とし、太守と称した。しかし実際には親王は赴任されなかったから、介が国の吏務をとった。「官職秘抄」に「上総常陸上野大守為親王二介為受領」とあるように、この三国の介を守とも称したのである。

注5 「常陸の北の方」を「花鳥余情」は「浮舟の君の母なり。これは紀伊守が妹なるべし。」(卷三十)とするが、「細流抄」は「是は当時の常陸守なるべし。」(卷十六)とする。今は「花鳥余情」に従った。